



## 統計から社会の実情を読み取る

### 第54回 教師としての満足と後悔

本川 裕 | Honkawa Yutaka  
アルファ社会科学株主席研究員

■東京大学農学部農業経済学科卒。財国民経済研究協会常務理事研究部長を経て、現職。立教大学兼任講師。農業、地域、産業、開発援助などの調査研究に従事。現在は、ネット上で「社会実情データ図録」サイト(<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>)を主宰するかたわら地域・企業調査等を行う。著作は「物流コストと日本の産業競争力」(学術誌『国民経済』、2004年)、『統計データはおもしろい!』(技術評論社、2010年)、『統計データが語る日本人の大きな誤解』(日本経済新聞出版社、2013年)等。



#### 多忙で授業時間も取れない日本の教師

OECDは、2013年に学校の学習環境と教員の勤務環境に焦点を当てた第2回目の国際調査(TALIS)を、日本を含む34か国・地域を対象に実施した。2013年結果の報道で日本の特徴として特に注目されたのは、日本の教師がやたら忙しくて、生徒指導に当たる時間がとれないという点であった。

図1はOECD調査の結果を示したグラフであるが、日本の中学校教師の仕事時間において、授業は週17.7時間であり、世界の中で26位とかなり少ない方であるにもかかわらず、仕事時間全体では53.9時間と世界一長かった。

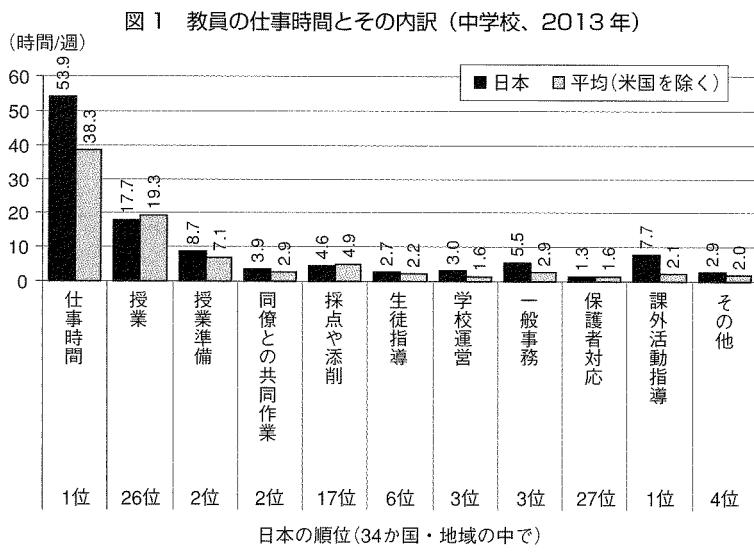
日本の仕事時間の内訳を調査対象国の平均とともに示しているが、日本の場合、授業、採点や添削、保護者対応の三つ以外は、全て平均よりも多くなっている。特に、学校運営、一般事務、課外活動指導で平均を大きく上回っている。こうした活動に時間を取られて授業など生徒の教育に直接当たる時間が少なくなってしまっていることがよく分かる。もっとも、授業時間が少

ない割に、PISA(OECD学習到達度調査)の結果は上位を維持しているのであるから、効率的・効果的な授業が行われているといえるかもしれない。

#### 教師にとって負担が大きい業務は何?

文部科学省は2015年7月に「学校現場における業務改善のためのガイドライン2015～子供と向き合う時間の確保を目指して～」を公表した。これは、OECDの調査結果を受けて、実際に教師が何の業務に負担を感じているかを調査し、その結果や先進事例を踏まえて、業務改善の基本的な考え方や改善の方向性、留意すべき主なポイントを示したものである。

このガイドラインの公表を受けて新聞各紙は、教師がどんな業務に負担を感じているかについての調査結果を報じた。しかし、報道は誤解を招きやすいやり方で行われた。すなわち、文部科学省は調査の集計結果から各業務の従事率と従事者の負担感率を公表したのであるが、この負担感率のランキングをそのまま報じたの



注) 教師の報告による休日等のない最近の「通常の1週間」の値。仕事時間には、週末や夜間など就業時間外に行った仕事を含む。仕事時間と内訳の時間はそれぞれ回答しており、後者の計が必ずしも前者と一致しない。回収率が基準に達していなかった米国は平均には含まれず。

資料) OECD, TALIS 2013 Results: An International Perspective on Teaching and Learning, Table 6.12

表1 負担の大きな中学校教師の業務トップテン

順位	業務	負担率	従事率	(従事者の)負担感率
1	通知表の作成、指導要録の作成	57.3	90.6	63.2
2	児童・生徒の問題行動への対応	51.6	93.3	55.3
3	保護者・地域からの要望・苦情等への対応	49.8	70.0	71.1
4	研修会の事前レポートや報告書の作成	48.8	68.2	71.5
5	学期末の成績・統計・評定処理	48.0	94.5	50.8
6	国や教育委員会からの調査やアンケートへの対応	45.7	52.9	86.4
7	部活動の技術的な指導、各種大会への引率等	44.3	91.3	48.5
8	週案・指導案の作成	43.9	83.6	52.5
9	日々の成績処理（テスト等のデータ入力・統計・評定）	42.4	94.4	44.9
10	テスト問題の作成、採点	42.3	93.9	45.1

資料) 文部科学省「学校現場における業務改善のためのガイドライン」平成27年7月27日

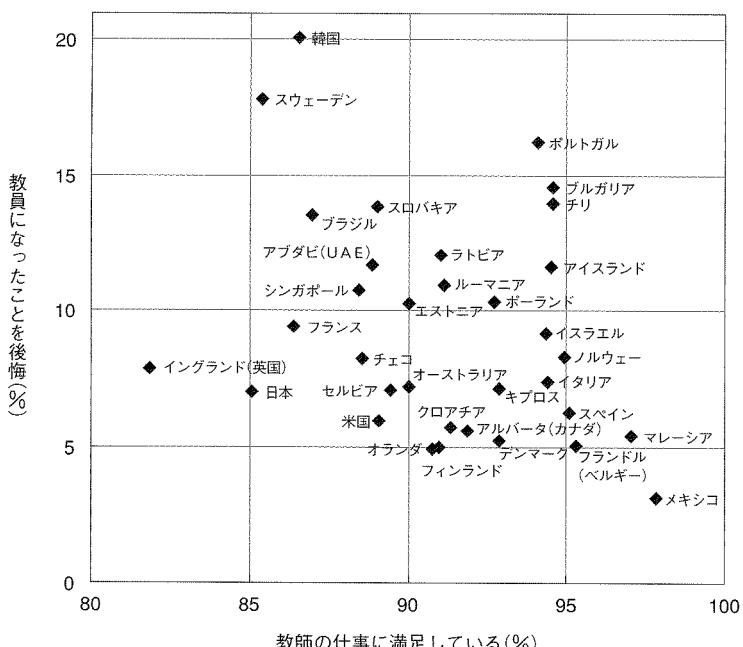
であった。したがって、トップは「国や教育委員会からの調査やアンケートへの対応」、第2位は「研修会の事前レポートや報告書の作成」だった。いかにも日本の教師は教育プロパーの業務より、周辺業務のほうに負担を感じているかの如き報道であり、読者ももっともだと受け取ったのであった。

だが、よく考えてみれば、従事している教師

が少なければその業務に負担感を感じているからといつても全体としては負担が大きいとはいえないのではなかろうか。そこで、表1では、従事率と負担感率を掛け合わせた数字を負担率と名づけ、こちらのランキングを示した。

報道とは異なって、まさに教育活動の中心ともいべき「通知表の作成、指導要録の作成」がトップである。また「児童・生徒の問題行動

図2 教師としての満足と後悔の国際比較（中学校、2013年）



資料) OECD, TALIS 2013 Results: An International Perspective on Teaching and Learning, Table 7.2

への対応」が従事者の負担感率はそれほど高くはないものの、93.3%の教師がこれに従事しているため、負担を感じる教師の割合では2番目に高い業務だということが分かる。これも教育の本体に入るだろう。「部活動の技術的な指導、各種大会への引率等」は負担感率はそう高くなきものの、従事率は9割以上と高いため負担は決して小さいとはいえない。また、「国や教育委員会からの調査やアンケートへの対応」は、一部の教師に負担が強くのしかかっていることから、教師間の業務分担にも配慮が必要なことも示唆されているといえるが、負担が最も大きな業務とはとてもいえない。

調査実施者の結果報告の数字を早呑み込みしたり、報道機関の記事を鵜呑みにせず、自分の実感を基にデータをよく確かめて適切な計数処理を行うことが、真理を見極め、本当の課題を抽出するためには重要だといえよう。

## 教師としての満足と後悔

これらと関連した教師の意識を知るため、最初にふれたOECDの調査結果から、学校の先生の教師としての満足度や先生になったことを後悔しているかについて国際比較してみよう。

図2には、X軸に「教師の仕事に満足している割合」、Y軸に「教員になったことを後悔している割合」を取った散布図を示した。相関を確かめるための散布図は相関図であると定義できるから、満足度が高ければ後悔している先生も少なくなるだろうという見込みで作成していることからいえば、この図は相関図とも呼べる。

まず、どの国でも全体的に先生は教師としても仕事に満足している割合が高いことが印象的である。ほとんどの国で満足度は85%以上なのである。その中で日本の先生は、満足度が85.1%とイギリスの81.8%に次いで低い点が目立っている。

表2 仕事満足度に関する日本の教師の回答率と順位（34か国中）

項目	設問文	回答率 (%)	順位	(参考) 韓国	
				回答率 (%)	順位
職業選択*	他の職業を選択した方が良かったのではないかと思っている	23.3	7	40.2	28
後悔*	教員になったことを後悔している	7.0	11	20.1	34
社会的評価	教職は社会的に高く評価されていると思う	28.1	18	66.5	3
好い点	教員であることは、悪いことより、良いことの方が明らかに多い	74.4	22	85.8	12
異動希望*	可能なら、別の学校に異動したい	30.3	28	31.2	31
天職意識	もう一度仕事を選べるとしたら、また教員になりたい	58.1	33	63.4	32
仕事の楽しみ	現在の学校での仕事を楽しんでいる	78.1	33	74.4	34
満足度	全体としてみれば、この仕事に満足している	85.1	33	86.6	30
良い職場	自分の学校を良い職場だと人に勧めることができる	62.2	34	65.6	33
仕事成果への満足度	現在の学校での自分の仕事の成果に満足している	50.5	34	79.4	33

注) 項目は順位の高い方から並べた。順位はすべてプラス方向の順位とした。すなわちマイナス面の設問(\*)は下からの順位である。

資料) 図2と同じ

また、見込み通り、満足度と後悔はおおまかに反比例している（相関度の低いマイナスの相関である）こともこの図から確認することができる。

それでは満足度の低い日本では教員になったことを後悔している教師が多いのかというとそうでもない。後悔している教師は7.0%であり、対象34か国中下から11位と低いのである。

これら2指標を含む教師の仕事満足度に関する10設問の結果の回答率と順位を掲げると表2の通りである。

日本の順位を見ると、全体としての仕事への満足度のほか、天職意識や仕事の楽しみ、良い職場の意識、仕事成果への満足度などは最下位か下から2位の低いレベルとなっている。それに対して、職業選択や後悔、あるいは社会的評価に関しては高いレベルにある。上述のように、教育以外の仕事で多忙なため時間拘束が非常に

長いなど、仕事の内容には大きな不満があるが、他の職業と比べれば、それを打ち消すだけの職業の安定性や待遇が得られていると感じている教師が多いのではないかと思われる。

日本との対比で興味深いのが参考に掲げた韓国である。日本よりも特に儒教の影響が強い韓国では教師の社会的評価に関しては第3位と非常に高いのであるが（ちなみに1、2位はマレーシア、シンガポール）、満足度に関しては日本と同様に非常に低いレベルにある。一方、日本では比較的高い職業選択や後悔に関しても韓国の場合にはレベルが低い。後悔について日本と大きく異なることは図2においても明らかである。韓国の教師は教員になったことを世界一後悔しているのである。おそらく韓国では仕事内容に不満が多いだけでなく、社会的に尊敬されている割に苦労が多く待遇や待遇も十分でないという意識が強いのではないかと想像される。